

妙宗円通記考

——優陀那和上の教化学——

三 原 正 資

(現代宗教研究所囑託)

本書は病床の加賀藩主夫人のために叙述された仮名法語であり、内容は極く平易な仏教概論、宗学概論であるといえる(『充洽園全集』第五編解題)。しかし、平易な叙述の中にも和上の教学の本質が現れている。

例えば、本書冒頭の「仏法は十界の依正を説き三世の因果をあかし、天地を一心におさめ一念のころをもつて法界の仏土を淨むる廣大の道を修行する教法」(五―一頁)、あるいは仏法とは、「十界の依報正報をあかして迷を断ち悟を開き、三世の因果を示して衆生の苦をすくひ成仏の樂をあたるよりほかは何事もこれなきなり」(五―二六頁)などは仏教の定義としても簡潔明瞭であるが、これはまた和上の代表的著作である『一念三千論』の趣旨(三―三四頁)を踏襲したものに他ならない。すなわち本宗の教学の原理を一念三千に求め、三世・十界という法華經の人間觀・世界觀を呈示して、救済の方途を述べたものが本書である。和上は、六道輪廻は虚談であるとする立場(第四篇所収『学仏具眼鈔』)から、後に「予モ亦曾テ此ノ邪坑ニ墮シテ」(『最實事論』四―二九五頁)と述べて十界三世六道輪廻を認める立場に転じ、言うまでもなく本書はその立場から叙述されている。

和上はなぜその近代的立場を転じて「幽冥の神靈のこひにより法を説き又読経し」(『日輝和上傳記』五―五一―六頁)た人と伝えられているのか。翻つて今日においても臨死問題、あるいは脳死・臓器移植問題において、人々は死

の科学的真相や人間存在とは何かということを大きく問い始めている。そもそも教化において大切なことは、我々が人間観・世界観を確立していることである。三世十界すなわち死後生や他界等の問題について本書を通して考えたい。

三世（死後生）の問題

私がこの問題に関心を持ったのは、『雨ニモマケズ』（一九六五年 教育新潮社刊 浅野晃）を読んで宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』が死後を舞台にした作品であることを知ってからである。『春と修羅』の序や妹トシ子の死を歌った一連の詩篇を読むと、賢治が死後の問題と取り組んだことがうかがえる。さらに『かいまみた死後の世界』（昭和五十二年 評論社刊 レイモンド・ムーディ）には衝撃を与えられた。伝統的な霊学の系譜とは別に、このころから臨死研究を始めとする死後の問題についての関心が高まってきた。

『宗教と科学の接点』（一九八六年 岩波書店刊 河合隼雄）は、この問題について学問的立場から包括的に論じ、深い理解を示している。この中で河合氏は次のように指摘している（十一頁）。

宇宙飛行士のシュワイカート氏とは、個人的にも大分話し合う機会があったが、彼は「日本の科学者は実に固い」と言っていた。つまり、日本の科学者は、宗教とかスピリットなどと聞くと、それだけですぐに「非科学的」と判断し、そして「まやかし」だと断定してしまうというのである。やはり日本のインテリたちは西洋近代を模範として、それに追いつこうと努力してきたので、欧米の現代人よりかえって西洋近代にしがみついているところがあるのだと説明して、何とか納得して頂いた。

このことは、実は仏教者にも当てはまるのではなからうか。わが国の伝統仏教は、近代化の過程の中でこの問題に触れようとしなくて今日に至っているといえよう。わが教団も先般の第二十四回中央教化研究会議において、この問題に取り組みはじめたという実状である。

『大法論』誌（平成三年四月号）が「人間の死と死後の世界」というテーマで特集を組んだが、仏教界の現況がうかがえる。本年の四月号では医療に関わる人に、十月号では仏教者にコメントを求め掲載している。私見では医療関係者三十三人中、死後世界を認めるもの六人、否定するもの六人。仏教者二十八人中認めるもの十四人、否定に傾くもの四人。それ以外は、今日の臨死研究を考慮しないで死とは大いなる命に帰るといふ意味の解答がほとんどである。仏教者の中から死後を認めるものの意見を挙げると、「凡夫である限り、死後の生存を否定するならば、真の仏教者ではない」（水野弘元）、「死後の世界について……仏教者としてこれを否定すれば、自己矛盾だと思う」（茂田井教亨）、「人間の死後の世界の有無について、結論的に断言するならば有るということである」（光地英学）。否定に傾くもの四人のニュアンスは微妙であるが、「私には従来説かれてきたような死後の世界があるとは思えません」（金治勇）、「解脱というのは解放であるから、あの世観念へのとらわれから解放されているということである」（中野東禪）などである。

死後生存を肯定する仏教者の中でも佐藤俊明師（曹洞宗）はこの問題に取り組み、「若い頃私は、心性常住なることわりを説くはこれ先尼外道の見なり、まったく仏法にあらざるを鵜呑みして、死後の世界を否定していた。……しかし、常にこの問題を胸に秘め、折りに触れ事に臨んで見聞を重ねて来た。おかげで今は死後の世界の存在を確信できるようにになった」と述べて、臨終と中有の用心を説く『正法眼蔵』道心の巻の一節を挙げていることが印象的だった。死後生存を否定する仏教者はさすがに少ないが、この問題に深い関心を持ち、臨死研究に触れた人は二、三を数えるのみである。

臨死研究・死後生存問題は、近代科学の確立した人間観・生命観・世界観に対するクエスチョンである。そこで我々に必要なことは、その視点から改めて仏教を見直して、人間とその世界に対する深い認識を回復することである。「何よりも重要なことは各人の生命観、宗教観の確立にほかならない」（三崎良周）。そうでなければ脳死・臓器

移植問題においても、「宗教者が医学界の一部や社会の動きに引き廻されているような風潮になっている」（伊藤真愚）と批判されても仕方がない。

『妙宗円通記』は、「大法伝通章」「三宝名義章」「仏法大意章」「初心要義抄」の四章から成り、三世・十界という人間観・世界観は「仏法大意章」で取り扱われている。

ここで三世について略説し、「現在の樂は過去によりてさだまれり今さら転じがたし」（五二―二八頁）と述べ、さらに十界について詳述している。これは「人界ヲ上モナキ者ト著」（『最実事論』四―二九五頁）していた。すなわち現在だけを考えるという近代主義の立場に対する反省が和上に生じたのである。そして和上は、「問ていはく、三世の因果十界の依正みな眼に見ぬ事にしてはなはだ信じがたしいかん。答ていはく、上にすでにのぶるがごとく三世の因果十界の依正これ仏法の正体なり。もしこれを信ぜずんば仏法にあらず」（五―四七頁）と述べている。

この仏教の実体は、三世因果・十界依正であるという和上の言葉には、現代の仏教論に親しんだものとしては最初驚きの気持ちを感じえない。しかしその心を見透かしたように、「禪定を修行し神通を得て徳をあらはし人の信を決する僧」（五―四八頁）がいないから疑うのであって、「小智にまかせて大法をうたがふ事なかれ」（同）と云うのである。和上は最初、教相は方便、すなわち法華経の説相の宝塔涌現・虚空住在などは虚談であると考えた。しかし臨死体験における体外離脱現象においては思念による瞬間移動も経験されるという（『文芸春秋』平成三年十二月号所収 立花隆「臨死体験」）。經典の記述は深い禪定体験の中の「事実」であるとも言える。そうであれば我々は文献研究とは異なる方法で經典にアプローチすることも必要ではないか。ここでは、単なる学問となってしまう近代仏教の学問の方法に対する疑問が呈示されている。そして死の問題に入っていくのである。

ここに列挙されている問いは、「人死していかんぞさらに生ずるや」（五―四八頁）、「人死して音信なし、いかん」（同）、「地獄あり天堂ありとはをんなわらべのすかしこと葉なり」（同）、「人の身に死してつちとなる、心はかたちな

し、いかんぞさとするところあらんや」(五—四九頁)、「儒教の教えをまもり悪をつくらず善をいたし心やすく身おだやかならば現世はこれにて事たりぬべし」(同)、などの輪廻の主体を問うもの、他界の存在を疑うもの、現在を生きることの大事を主張するものであって、死後生存に関する現代の人々の疑問と変わることがない。そうであればこそ和上は、「正信ヲ生ゼシメンガ為ニ、三世六道因果心報ノ実見ヲ集録シテ諸人ニ貽ラント欲ス。コレヲ古来ニ求メズ。近世現在ノミヲ挙ゲ疑ハシキヲ闕テ其ノ実事年月地名ノ著シキヲ記ス。……コレ末代ノ因果経タラン」(『最実事論』(四—二九五—六頁))との試みを抱いたのである。

現代においては臨死体験の研究が死後生存の科学的証明になるかとも思われたが、臨死体験は単に大脳の作用の結果であるとの批判もあり、決着は付いていない。しかし死後生存問題は今年(一九九一年)の三月に、『立花隆レポート 人は死ぬとき何を見るか』と題してNHKテレビで放映され、その後も『文芸春秋』に同氏の臨死問題研究が連載されていることにも示されているように、人々の真剣な関心の対象になっている。

しかし近世の儒教的伝統、近代の合理主義社会にあつては、人々のこのような関心と試みは常に片隅へと追いやられ、異端視されたのであった。既に述べたように伝統仏教もその流れに追隨したのであるが、果たしていつまでもそれで良いものであろうか。宗教は合理性と非合理性、現実と異次元の両者をつまみ、人間存在の全体を探るべきではなからうか。

他界について——十界とは何か——

近代において三世が否定されるとともに、否定されたものが他界の存在である。三世にわたる六道輪廻を認めるならば、必然的に他界を措定しなければならない。和上においては十界がこれに当る。本書の「仏法大意章」における十界の叙述は仏教の伝統的世界観を踏襲し、『一念三千論』の記述とほぼ同じ趣旨のものである。その十界常住論は、

和上が十界の存在を信じるに至る前段階を示すものともいえよう。和上は十界をどのように考えていたのであろうか。臨死体験は脳の作用の現れであるという意見を既に紹介したが、この考え方を押し進めていけば、「悟り」も大脳の働きの一つと言う極論が生まれてくる。こうして全てを大脳の機能に還元するならば、宗教などは実につまらないものになってくる。かつて排仏論者の平田篤胤は、「仏道諸宗の安心さとりと云うことの根を、段々におして探れば、先日も申す通り、氣海丹田に氣を充しめ、安心して、なるべくは長寿を保んとするが故のことで、是より外には何にもなしでござる、然るにその趣意なきことを趣意ありげにもてなして、仏者どもが是を事々しく悟りなどと云立て……一向やくたいなことござる」(岩波書店『日本仏教史』第十卷 辻善之助)と批判している。

これに対して三世を認めることは、輪廻の主体である魂とか心を想定し認めることである。和上は「善心はかたちなしといへども身の主なり、よく因業をつくり果報をうけ、迷にいり悟りをひらく。ただしこの事たやすく解しがたし。まことに心は虚空の如く業因はかけの如し。しかりといへども影の如きの業因かたなく実体なしといへどもかならず死してたちまち果報をあらはす。三世の因果やむことなし」(五—四九頁)と述べている。

それでは輪廻する主体と世界とはどのような関係にあるのか。

依正の二報は一体のものとして前世の果報として受けるのであるから、我々の生きている世界は輪廻の主体としての心に相応するものとして現前している、業所感の国土であると考えられている。そこで「現在の業は過去によりてさだまれり、今さら転じがたし……能つとめて善根を修し未来の楽報清浄の善果を求むべきものなり」(五—二八頁)とも言うのであるが、これはこの法語が病床にある女性に宛てたものという条件を考慮したほうがよいであろう。

和上の宗教の原理は一念三千であるから、「天地を一心におさめ一念の心をもって法界の仏土を浄むる」ことを正意としなければならない。すなわち輪廻を認めつつも現世においては現在の一念の心の在り方を変えていくことによって所住の世界が変わっていくと理解すべきであろう。この十界説の意義とは、「悟りなどというものは心のきま

ぐれ」と考えるのではなく、我々の心には、すなわちまたこの世界には仏界が確かにあるのだと示していることである。

このことについては、東洋思想と欧米の心理学が融合して生まれたトランスパーソナル心理学（前掲の『宗教と科学の接点』にも紹介されている）の意義について、それが——従来の西欧心理学の主流と決定的にちがうのは、人間の心について、これまで「神秘体験」「超常体験」「回心」「啓示」「覚醒」「悟り」などの言葉で呼ばれてきた体験を、（篤胤が批判したように…筆者）たんなる幻想や異常心理、よくても特殊な心理として片づけるのではなく、むしろ人類の未来にとって決定的に重要なものとして、超越的心理の存在をはっきり認定し、そうした体験が起こる心の領域を含んだ、より包括的な心の構造モデルを提示しているところである——（『トランスパーソナル心理学』青土社刊 岡野守也）、と述べられているのが大きな示唆を与えてくれるのではなからうか。

さて、この三世輪廻にしても十界にしても、宗祖が「一品二半ヨリノ外ハ邪教ト名ク」（『観心本尊抄』）と示された寿量品（自我偈）に示されている（日輝は『一念三千論』巻三で本国土の十界を自我偈のなかに解釈している）ことを、我々本宗の僧侶は考えなければいけないであろう。

既に述べたように、和上は『最実事論』で自分もかつては信じていなかったが、今は「三世因果六道輪廻ノ道理ニ於テ決定信ヲ生ズルコトヲ得タリ」（四―二九五頁）と明かしているが、嘉永三年（五十一歳）とされている『庚戌雑答』では「輪廻一向無シトスベカラズ」（四―三八一頁）と述べて、輪廻説はインドの一般の思想にしたがい大衆を説得するために立てた法門である、輪廻説に執著すると「妖邪ヲ増長スル」こともあるので相手に応じて説かなければならない、とある。この事から考えると、『妙宗円通記』『最実事論』の三世因果六道輪廻説は、日輝の晩年の所信を反映しているものであろう。

輪廻説に対して抱いた日輝の危惧については、同様に現代でも多くの人が指摘している（河合隼雄前掲書九十九頁、

岡野守也前掲書一六八頁)。しかし、近代的知性によって仏教を考え抜いた日輝が最後に死後存在の確信に到達したことを私は大事であると考えている。「みな眼に見ぬ事にしてはなはだ信じがた」(五一―四七頁) きことであるからである。

それは知性をすてて迷信の人となったということではなく、知性と信仰ゆえに見えざる世界に探求の眼が向っていったのだと、私は想像する。現代多くの知性的な人々が目に見えない世界を種々の方法で探求しているのが現実である。これは我々教化に携わるものにとって無視できない事実であり、私たちは臨死研究や死後生存問題に強い関心を持つべきであろう。それがポスト・モダンにおける宗教者の態度である。

※本稿は、平成三年十一月十四日に宗務院にて行われた第四十四回日蓮教学研究発表大会における発表をまとめたものです。